

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：34509

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06763

研究課題名(和文) 北朝初期の文芸における治世観 花園天皇から光厳天皇へ

研究課題名(英文) The views of reign in the literature of the early Hokucho: From Emperor Hanazono to Emperor Kogon

研究代表者

中村 健史(nakamura, takeshi)

神戸学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：50753505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、花園天皇(1297-1348)と光厳天皇(1313-64)を中心とする北朝初期の文芸を取りあげ、そこに込められた治世観を検討した。はじめに、研究の基礎作業として、北朝の文芸・学問に関する資料を収集・分析した。

次に、花園天皇の作品を注釈・読解し、治世観を分析した。主な研究成果としては、「誠太子書」の詳細な注釈を発表し、そこにこめられた治世観が花園天皇の自意識と密接に関わることを指摘した。さらに、光厳天皇の作品を注釈・読解し、治世観を分析した。主な研究成果としては、『風雅和歌集』『光厳院御集』などに収録された光厳天皇の和歌に、治者としての自己を謙遜する態度が見られることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I picked up literature in early Hokucho centered on Emperor Hanazono (1297-1348) and Emperor Kogon (1313-64) and analyzed the view of the reign. First, as basic research work, I gathered and analyzed materials on literary and academic subjects in Hokucho.

Next, I annotated the works of Emperor Hanazono and analyzed the view of his reign. I made annotation of Kaitaishisho and I pointed out that the view of the reign in this work is closely related to his own consciousness. Thirdly, I annotated the works of Emperor Kogon and analyzed the view of his reign. I pointed out that Emperor Kogon was depriving himself in his waka despite being an emperor.

研究分野：国文学

キーワード：和歌

1. 研究開始当初の背景

北朝における文学と政治の交渉については、井上宗雄、岩佐美代子をはじめとして様々な先行研究がある。しかし、多くの場合、それらは史料による歴史的・伝記的事実の追求ではあっても、文学作品そのものの研究とは言いがたかった。また、時代的には鎌倉期が中心で、建武の新政前後、特に花園天皇・光厳天皇の二代については手薄な状態が続いてきた。

たとえば、この時期、花園天皇は帝王としての心構えを説いた「誠太子書」(漢文)を残している。また、花園の膝下に成長した甥・光厳天皇は、家集『光厳院御集』に天皇としての使命感を詠っている。しかし、こうした作品については、従来、十分な注釈・分析が行われてきたとは言い難く、研究はなお発展途上にある。

本研究は、いまだ本格的な考察の及んでいない花園・光厳二代の文芸を通観し、作品を精密に読み解いた上で、そこに込められた治世観を表現レベルで解明しようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究では、花園天皇(1297-1348)と光厳天皇(1313-64)を中心とする北朝初期(建武の新政前後)の文芸を取りあげ、そこに込められた治世観を分析した。花園・光厳二代の文芸は、従来かならずしも注目されてこなかったが、和歌・連歌・漢詩文などの分野にわたって多くの作品を残しており、そこには為政者としての意識を色濃く反映した表現が散見する。

たとえば、この時期の文学作品としては、まず花園・光厳の編纂した勅撰和歌集『風雅和歌集』があり、治世と和歌の関係を読み解く上で好個の材料を提供する。また、家集『光厳院御集』にも治世観を反映した和歌は多い。漢文著作ではあるが、花園が光厳のために帝王の心構えを説いた「誠太子書」も注目すべき文献である。さらに、連歌集『菟玖波集』にも花園・光厳の作品が収められており、治世観との関わりが注意される。

本研究では、以上のような作品を対象とし、その表現レベルにおいて、治世意識がいかん反映されているか、研究を進める。

これまで中世文学は「隠者の文学」「閑居の文学」とされ、高踏的な美意識や無常観のみが強調されてきた。本研究を通して、当時の人々がいかん現実と向きあい、文学的表現へと昇華したかが解明されれば、中世文学の新たな一面が提示されることになる。

また、従来、文壇史の研究は伝記的事実の解明に力を注ぎ、作品における表現研究とはおおむね没交渉であった。「治世観」という

枠組みによって、実際の行動と、背後にある思考、そしてその文学表現を複合的・多角的にとらえることが可能になる。

さらに、北朝(京極派)の文芸については、個別の作品研究や注釈がなお手薄で、先行研究を無批判に踏襲した例が少なくない。精密な注解を試みることで、先学の研究成果を再検討・修正することが可能になる。

3. 研究の方法

本研究では、主に花園天皇・光厳天皇の二代にわたって、北朝宮廷で作られた文芸を分析し、作者の治世観がいかん表現されているか、調査する。研究計画の進め方は以下の三点を中心とした。

花園天皇・光厳天皇の治世観を検討するための基礎的調査として、北朝の文芸・学問に関する資料を収集・分析し、データベースを作成した。

花園天皇の作品を注釈・読解し、治世観を分析した。主な対象としたのは、『風雅和歌集』その他の和歌、漢文著述「誠太子書」などである。

光厳天皇の作品を注釈・読解し、治世観を分析した。主な対象としたのは、『風雅和歌集』その他の和歌、家集『光厳院御集』などである。

研究にあたっては、あくまで実証的な資料調査・読解に立脚し、訓詁注釈を重んじて作品を分析することを旨とした。

4. 研究成果

花園天皇「誠太子書」は中世史上の重要史料とされながら、本格的な注釈は思いのほか乏しく、訓詁や字句の出典に関して再考すべき事柄も少なくない。そこで本研究では、まず詳細な「誠太子書」の注釈を作成した。

その結果、「誠太子書」は光厳天皇に対する訓戒の書であると同時に、花園天皇の自己表現として、きわめて興味深い作品であることが分かった。

すなわち、つとに坂本太郎氏は論文「帝範と日本」のなかで、太子に書を与えて教戒する「誠太子書」の形式が『帝範』にならったものである可能性を示唆しておられる。『帝範』は唐太宗が帝王のあるべき姿を論じて、太子李治(後の高宗)に示した著作。すでに平安期には舶載され、『花園院宸記』にも読書の記録が残る。「誠太子書」を仔細に検討してみると、たしかに『帝範』に基づく表現が散見し、撰述の際に参照された可能性は高い。

しかし「誠太子書」の成立に深く関わった漢籍としては、もうひとつ『尚書』無逸を挙げることができる。従来、特段の指摘はない

ようであるが、二書を比較すると、「稼穡の艱難を知らず、小人の勞を聞かず」という無逸の文章が引用される、帝王としての徳が在位期間の長短を左右する、という発想が見られる、上智や下愚の性を改めることはできないが、それ以外の多くは学問によって徳を高めることができるのだから、怠ってはならないと説く、等の共通点がある。

無逸は周公が甥である成王を誡めてつくった文とされている。周公は帝位に即くことなく、兄武王やその子成王を補佐した。同じように花園院は治天の君とならず、兄後伏見院やその子量仁親王を補佐すべき立場にあった。特に父伏見院の遺詔によって子孫の即位を禁じられ、量仁親王の教育を兄に代わって付託されたことは大きな意味を持つ。院はみずからを周公に擬し、無逸になぞらえて「誠太子書」をつくったのではないか。

また『風雅和歌集』『光厳院御集』『院六首歌合』などに収録された光厳天皇の和歌を分析することで、以下の事柄が明らかになった。

「世もくもり人の心も濁れるは我が源の澄まぬなるべし」(『院六首歌合』)は『荀子』君道篇そのほかに見える「君なる者は民の原(みなもと)なり。原清ければ則ち流清く、原濁れば則ち流濁る」を踏まえ、君主たる「我」が濁っているために世が乱れるのだ、とうたうものである。

「寒からし民の藁屋を思ふには衾のなかの我も恥づかし」(『風雅集』、『光厳院御集』)は、醍醐天皇が寒夜、衣を脱いで民の苦しみを思いやったという故事(『大鏡』ほか)を踏まえ、そのように振るまえないみずらを恥じるという歌である。民の寒さに同情するという発想には、あわせて白居易「酔後狂言して蕭殷二協律に酬贈す」詩からの影響も考えることができよう。

「舟もなく筏も見えぬ大川に我渡りえぬ道ぞ苦しき」(『光厳院御集』)は、殷の高宗が傳説に与えた「若し巨川を濟(わた)らば汝を用て舟楫と作ん」(『尚書』説命)という言葉の本説として、不徳のゆえに政を補佐する家臣すらいないと嘆く歌である。なお、説命の句は古来きわめて有名なものであるが、『太平記』巻二十三にはこれを引いて足利直義の病悩平癒を祈った光厳院の願文が収められており、注意される。

以上三首の歌には共通して「我」のすがたが描かれている。『光厳院御集』の「ともしび」連作にあらわれる「我」と比較すると、一方は治世の苦しみ、他方は閑居の安らぎをうたって対照的な自画像と言えるが、見方を変えてみると、どちらも実際の光厳院その人をありのままに描いたものではなく、治世の歌、閑居の歌にふさわしい人物像を踏まえており、仮構された「我」の肖像とでもいうべき性質を持つことが分かる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

中村健史
伏見院和歌考 漢文学からの影響
国語国文 86-4 216-227 頁
2017年4月
査読無

中村健史
誠太子書箋釈
神戸学院大学人文学部紀要 37 101-116 頁
2017年3月
査読無

中村健史
蕪村『俳仙群会図』賛をめぐって 「文こゝ」
にあらありがたや」考
太平詩文 70 53-62 頁
2016年11月
査読無

中村健史
光厳院の治世歌 「我」の形象
国語国文 85-9
1-18 頁
2016年9月
査読有

花園天皇日記研究会(阿尾あすか、窪田頌、小橋慧子、坂口太郎、田村亨、中村健史、長村祥知、花田卓司、水嶋綾乃、三角健、横澤大典、芳澤元、米澤隼人)
『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年六月記 訓読と注釈
京都大学国文学論叢 35
113-146 頁
2016年3月
査読有

中村健史
伏見院歌出典考 雲鳥、求めぬ友、残せる文
研究と資料 74 1-9 頁
2015年12月
査読無

大山和哉、中村健史
中院通茂講『未来記雨中吟聞書草』 解題と翻刻

京都大学國文學論叢 34 129-168 頁
2015 年 9 月
査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

中村健史
花園院「誠太子書」考
和漢比較文学会第 133 回例会(西部)
2016 年 11 月 12 日
ノートルダム清心女子大学(岡山県岡山市)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村健史(Nakamura Takeshi)
神戸学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：50753505

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()